



タテチョウ遺跡発掘調査概報



1991年3月

松江市教育委員会



第1図 クテチョウ遺跡位置図



第2図 発掘調査位置図

タテチョウ遺跡発掘調査概要報告書

1. 本書は、平成2年度において松江市教育委員会が実施したタテチョウ遺跡発掘調査にかかる概要報告書である。
2. 本調査は、松江市教育委員会が島根県松江土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

委託者 島根県松江土木建築事務所長 倉敷 和夫
受託者 松江市 代表者 松江市長 石倉 孝昭
主体者 松江市教育委員会 教育長 諏訪 秀富
事務局 教育次長 北村 悅男
社会教育課長 杉原 精訓
調査担当者及び調査員 文化財係長 同崎雄二郎
同係主事 寺本 康

4. 出上遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
5. 本書の編集は同崎の協力を得て寺本がこれを行った。

目 次

I.	発掘調査に至る経過	3
II.	周辺の歴史的環境	5
(1).	タテチョウ遺跡の概要	5
(2).	周辺の遺跡の概要	5
III.	調査の概要	6
IV.	小 結	14

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。



I. 発掘調査に至る経緯

松江市都市整備部区画整理課では、昭和49年度から西川津町一帯約126haの水田地を中心として「松江窓都市計画松江北部上地区区画整理事業」を推進してきた。

事業地内を流下する1級河川朝酌川の右岸については、すでに換地手続きを終えて水田が盛土され、住宅・店舗の建築が急ピッチで進められている。

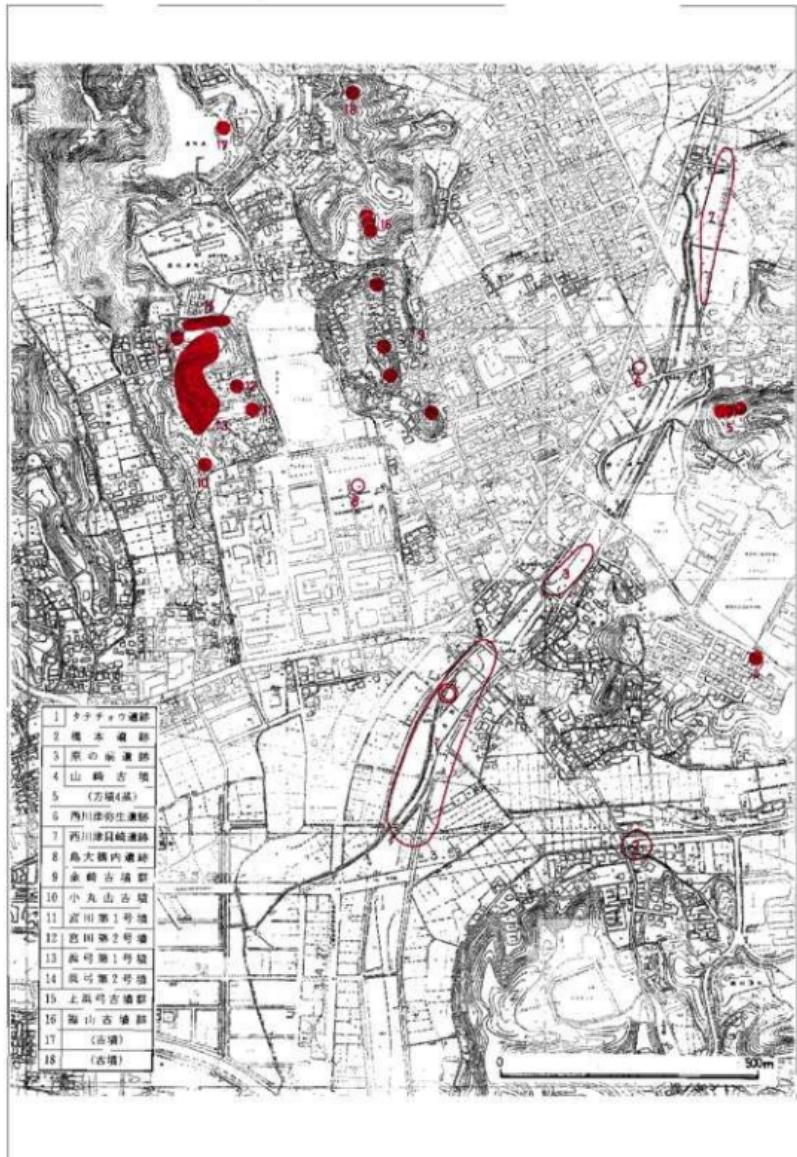
ところが、この朝酌川河川敷及び市道上追子笠無線の周辺一帯には、古くから周知の遺跡として「タテチョウ遺跡」が所在しているため、こうした区画整理事業や河川改修事業に先立ち、県教育委員会や市教育委員会で発掘調査が実施されてきた。

今回の調査区域は、新加羅加羅橋の建設工事にともない、下流域の水流を停滞させることなくスムーズに流下させることを目的として、タテチョウ遺跡の所在する河川敷約900m²を調査し、その後松江土木建築事務所において河川改修事業として河床掘削工事を行うものである。

発掘調査の地番は松江市西川津町1261・1262-1・1262-2・1262-3・1263-1・1263-2である。現地調査期間は平成2年10月25日から平成3年1月17日までのうち36日間を要して行った。以下にその概要を報告する。



調査地全景（朝酌川下流を見る）



第3図 周辺の遺跡分布図

II. 周辺の歴史的環境

(1). タテチョウ遺跡の概要

タテチョウ遺跡は松江市の北東、西川津町地内に流下する朝酌川の流域に広がる大規模な遺物包含地である。

昭和9年朝酌川の堰設工事に伴って、土器片などが出土したことからその存在が明らかとなり、昭和24年3月山本清氏の手によって一部試掘調査が行われた。その結果、出土遺物は縄文・弥生・古墳の各時代にわたる複合遺跡であることが分かり、特に当時あまり知られていなかった弥生時代前期の土器が認められたことから学界の注目するところとなった。こうしたことから、朝酌川流域の河川敷と水田下には多くの遺物が堆積していることが明らかとなつたが、その範囲については極めて不明瞭であった。

昭和49年、タテチョウ遺跡を含む一帯の朝酌川について県土木部河川課で河川改修事業を実施することになり、それに伴って島根県教育委員会で遺跡の範囲を確認するための予備調査を実施した。その結果、縄文、弥生、古墳の各時代の土器に加え木製品なども出土し遺跡の範囲は最低南北300mに及ぶものであることが判明した。

昭和52年度には、県教育委員会が先に予備調査した部分を中心に本格的な調査が開始され、各時期各種の膨大な量の遺物の出土があった。この調査は平成5年まで続けられる予定で、これまでの調査成果は順次報告書として刊行されている。

一方松江市の計画した北部上地区画整理事業区域内の基幹道路にも本遺跡が該当することから松江市教育委員会も昭和49年から同50年にかけて試掘調査を実施し、縄文から歴史の各時代にわたる土器・木器・石器類を発見した。この後区画整理事業に伴う河川改修や水路工事、タテチョウ遺跡の範囲確認調査も含めて昭和59年から平成2年まで毎年調査を実施し、遺跡の範囲や遺物包含層の特徴、時代区分等が次第に明らかになりつつある。

(2). 周辺の遺跡の概要

朝酌川が北方の持田平野から西南方向へ流下して大橋川へ合流する区間では多くの遺物が採集されているが、遺物を包含している砂礫層は海拔0mから-0.4mのかなり低い位置にある。

縄文時代の遺跡としては他に西川津遺跡や金崎遺跡が挙げられるが、いずれもこうした砂礫層から出土している。

西川津遺跡は持田町貝崎地区の朝酌川河川敷に所在し、縄文時代早期から弥生時代にかけ

けての土器や石器・木器・シジミの貝塚・掘立柱建物跡が発見されている。金崎遺跡では縄文晩期の壺型土器が出土している。

弥生時代にはタテチョウ遺跡や西川津遺跡のほか、島根大学構内でも遺物が発見されるようになり、遺跡の数も量も多くなってくる。

古墳時代になると、柴遺跡や堤廻遺跡で前期の住居跡が発見されているほか、金崎古墳群や山崎古墳、柴古墳群などが知られるようになる。金崎第1号墳は全長32mの前方後方墳で、竪穴式石室からは5世紀後半の古式の須恵器や玉類・子持勾玉・鉄製の武器類などが出土し川津地区の盟主的な古墳として全国的に有名である。



南北方向土層断面（右一南、左一北）



漆塗碗

III. 調査の概要

調査地は新加羅加羅橋の南方の河川敷である。従って、東西50m、南北約20mの調査区全体を矢板施工によって囲み、更に常時排水を行うための電気設備をして湧水に備えた。

調査の方法は、昭和63年度に島根県教育委員会の試掘調査結果を参考として、灰色粘質土層から灰色粘質土と黄灰色細砂層の相互堆積層まで



赤漆塗碗

の遺物包含層を確認して、遺物の採取と遺構の検出に努めることとした。ところが暗灰色粘土層の上部20~30cmで漆器碗などの木製品が出土したほかは、下部の一部で獸骨が出土しただけで全面にわたり約2mの厚さでほとんど遺物を含まない暗灰色粘土層が堆積していたので、この部分は重機による掘削によって除去した。

最下層暗茶褐色シルト土の層までの残り20~30cmの間には暗青灰色や黄褐色の砂層や礫層、粘土層が複雑に入りこんでいて、こうした層中から須恵器片や弥生土器片、中世陶器輸入白磁が出土している。

調査地東側では特に漆碗・獸骨が集中して発見された。須恵器や弥生式土器の破片は摩滅した細片が多く、しかもほとんどすべての遺物包含層中に共伴して検出される。また下部の青灰色砂礫層から煙管や古銭が出土していることから、今回の調査区域はかなりの攪乱を受けたものと考えられる。

出土遺物の代表的なものを以下に記する。

1は口縁部に斜行する刻みを入れる。口縁部近くの肩部に4条の沈線が施されている。弥生時代前期の甕片ではないかと思われる。推定口径18.6cm。灰色砂層出土。

2も弥生時代前期の甕片と思われ



下 駄



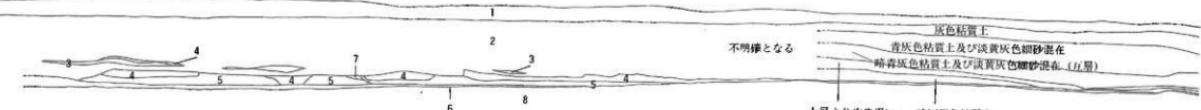
墨書のある板



木器出土状況（折敷底板など）

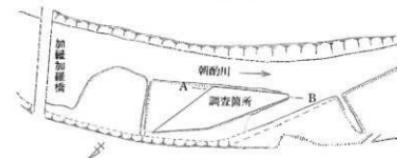
A (上流) 標高-1.5m

B (下流)



0 5M

灰色粘質土
青灰色粘質土及び淡青灰色細砂混在
暗青灰色粘質土及び淡黃褐色細砂混在(互層)
上層よりやや厚い
暗灰褐色粘質土



第4図 タテチヨウ遺跡調査区断面図

る。1と同様に口縁部に斜行する刻文、胴部の上半部は細い条痕文によって調整。胴部のほぼ中央に径5mm程の円形の貼り付け文が巡っている。内面は手びねりによる整形痕がある。推定口径15.2cm。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

3は弥生時代後期の甕の口縁部から肩部にかけての破片。多量の炭化物が付着しており、煮沸用に使用したものであろうか。推定口径22cm。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

4は口縁部に3条の沈線のあるもので、弥生時代後期頃のものと思われる。口径16.2cmを測る。青灰色粗砂層出土。

5は大型の甕片の口縁部と思われる。口径24cmを測るもの。弥生時代前期のものと思われる。青灰色粗砂層出土。

6は灯明皿に使用したと思われる須恵器質の小型の环である。口径8cm、器高2.3cm。底部は窪んでいて、回転糸切りによる切り離し痕跡が見られる。平安時代のものと考えている。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

7は底内面に墨書のある平底の須恵器質の环である。文字は「平」とも読めるが、右上の部分は不明である。こうした形態の墨書き上器は松江市福原町の辻原遺跡でも出土している。



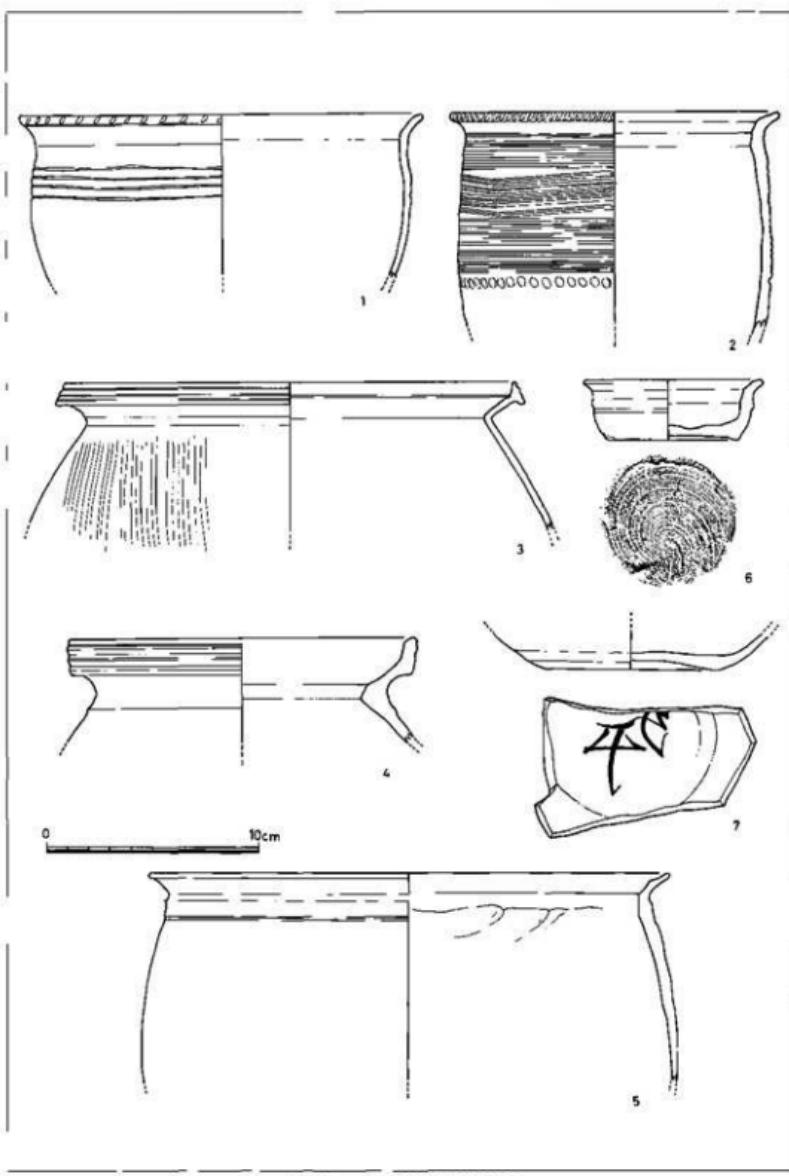
5 出土状況



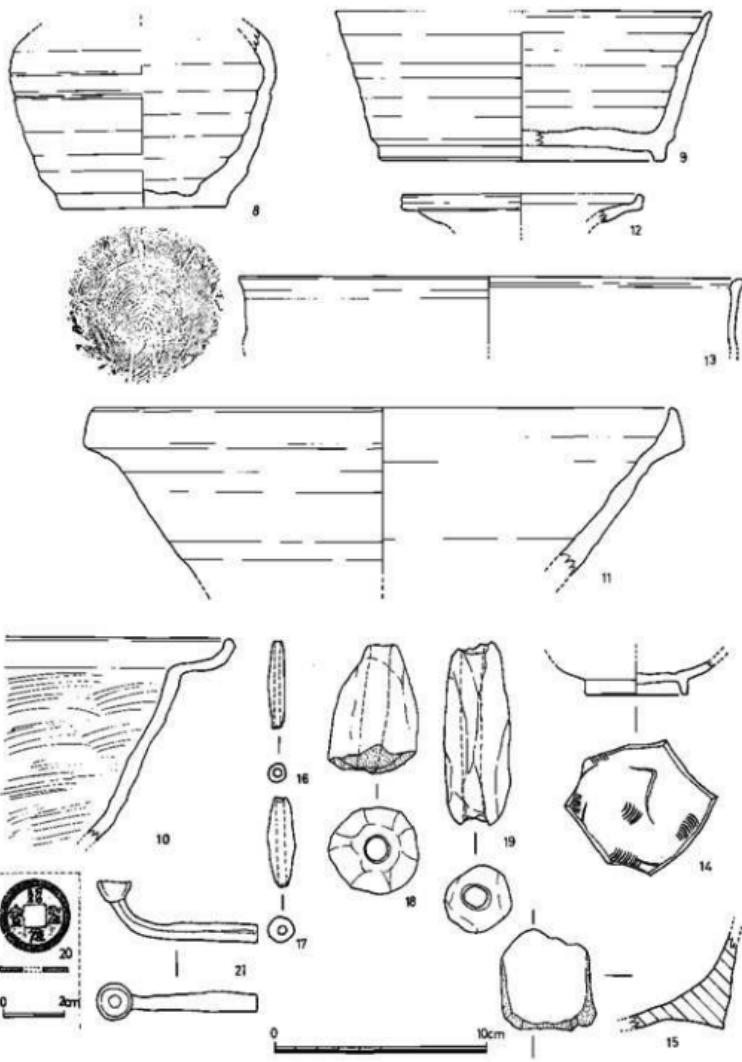
6 出土状況



7 出土状況 (ニホンジカ左下顎骨)



第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)

る。平安時代の頃と推定している。

青灰色粗砂疊層出土。

8は須恵器質の瓶の脇部と思われる。底部は平坦で回転糸切り痕が残っている。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

9は高台の付いた須恵器环である。底部から直線的に外傾しながら立ち上がるるもので、8・9とともに8世紀～9世紀代のものと考えられる。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

10は鍋の口縁部片ではないかと思われる。亀山焼系統であるが、同様の破片は松江市大井町の別所遺跡でも出土している。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

11は備前系の片口かとも思われるが、内面に搔き目が無く別の用途に使用されたのかもしれない。灰色砂層（下部粗砂層中）出土。

12・13は瓦器様の壺の口縁部片と思われる。いずれも細片で断面は摩滅している。青灰色粗砂疊層出土。

14は高台径4.6cm、高台高0.7cmを測る白磁の碗である。内面に鶴描文が施されている。同様の破片が松江市大庭町の出雲国造館跡の調査を行った時に出土しており、11～12世紀頃のものと考えている。青灰色粗砂疊層出土。

15は砂岩質の砥石である。断面三角形をしているが、そのうち2面が使用されている。



漆塗碗

青灰色粗砂疊層中の出土。

16～19は土鍤である。18は半分しか残っていない。小さいもの（16）は長さ4.1cm、大きいもの（19）は8.5cmを測る。青灰色粗砂疊層中の出土。

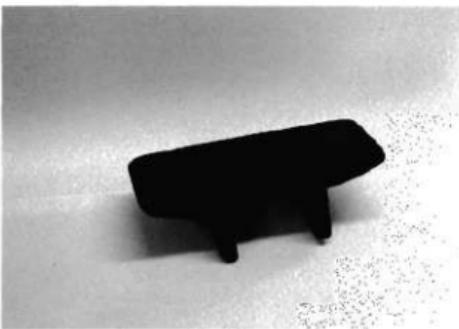
20は今回調査した最下層の青灰色の砂層から出土した古銭である。「紹聖元宝」と思われ、その初鋲年は1094年である。



弥生式土器(右下は墨書き入須恵器)

21は真鍮製の煙管である。雁首の

部分で、長さ7.45cm、火皿は径1.7cm、
深さ0.9cmを測る。暗青灰色砂礫層出
土。



下駄

今回の調査区域は、タテチョウ遺
跡の中では比較的遺物量の少ない地
区であったが、漆器や獸骨の大量の

出土は、遺跡の性格を知る上で好資料であった。

タテチョウ遺跡の範囲は、これまでの数々の調査から概略把握出来るようになったが、
いずれも上流から豪雨や洪水などの折に流されてきて堆積したものと考えられ、今回の調
査区域も同様のことがいえる。各時代の集落が一体どこにあったのかは、遺跡が広範であ
るため今もって不明である。こうした調査を機会あるごとに行うことによって、さらに細
かな遺跡の性格が突き止められることを期待するものである。



タテヨウ遺跡発掘調査概報

平成3年3月発行

発行 松江市教育委員会
社会教育課

印刷 しまね東京印刷株式会社
松江市浜乃木5丁目2番10号